

# 成果報告書

記入日 2021 年 7 月 29 日

フリガナ:(り みな) 氏名:李 美奈	渡航先国名 イスラエル	留学先の所属機関:ヘブライ大学ロスバーク校 帰国後の所属機関:東京大学大学院
研究テーマ:17世紀ヴェネツィアのユダヤ人共同体における法と宗教の関係		
研究期間:2019年8月~2021年7月(2年0ヶ月)		
<b>研究成果(概要)</b> 授業や研究者との交流を通して、研究に必要な語学や史料精読のスキルを身につけ、必要な史料収集を終わらせ、研究の枠組みを大きく改善し進めることができた。		
<b>研究成果(詳細)</b> 1) 資料精読のための技術取得 留学の目的の一つは、資料を十分に読めるためのヘブライ語を習得することであった。1年半にわたり現代ヘブライ語の授業を受け、六段階の上から2番目までのレベルまで進み、全てのクラスをA以上の成績で修了した。コロナの影響で留学2年目には上級の大学院生用のクラスがなくなってしまっており、また資料を読むためには必要ないと判断したため、一番上のレベルには進まずに語学学習を終えた。2年目の春学期には、Ofra Tirosh-Becker 教授による中世ヘブライ語のクラスに参加した。この授業で扱ったのは中世のアラビア圏でのヘブライ語であり、私が扱う近世イタリアのヘブライ語と異なるが、書き言葉のみで使われていたヘブライ語における古典文法の名残りと、離散先の日常言語の影響がどのように中世のヘブライ語文法に現れるのかを大いに学んだことは、資料精読に役に立っている。実際、クラス修了後には資料が読みやすくなっていて驚いた。 また、資料を実際に読んでいく授業に参加し、その手法を学んだ。コネチカット大学から招聘されていた Susan Einbinder 教授の中世ユダヤ文学の授業では、物語と歴史の関係性など歴史学の重要な議論を踏まえながら、文学から歴史がどこまで構成できるのかを学んだ。Einbinder 教授は、当時まだヘブライ語が十分に読めなかった私のために、時間を割いて個別的に資料精読に付き合ってください、古いヘブライ語の読み方から記述の特徴から読み取れる要素など、具体的な技術を示してくださったのは非常に有難い経験である。 指導教官の Roni Weinstein 教授の授業は、イスラム圏・キリスト教圏の広い中世ユダヤ史の中で、特に法や儀礼の変化に関わる重要な資料を読みながら歴史を辿っていった。Weinstein 教授は法的な契約から詩に至るまで様々なジャンルのテキストを取り上げ、そこから読み取れるものを議論の中で示すことで、読み方を教えてくださった。		
2) 史料収集 今回の留学の最も重要な目的は資料の収集である。特に、研究対象である17世紀ヴェネツィア・ユダヤ社会の出版資料、及び近世イタリアのヘブライ語で書かれた先行研究は、日本ではアクセスが困難であった。国立図書館とヘブライ大学図書館には多くの資料が揃っており、可能な限り通い詰めて先行研究の知識を大幅に広げるとともに、必要な資料の複写を行なった。イスラエルでは2020年3月から約1年間にわたり、ロックダウンを3度繰り返し、その間は図書館も閉館となったり利用制限がかかったりしたために、満身に資料にアクセスできない期間もあった。しかしロックダウン中は、ヘブライ大学が所有する電子書籍や電子ジャーナルを活用し、優先順位をつけてアクセスすべき資料のリストを作成してロックダウン解除に備えた。必要なものについては、おおかた収集を終えて帰ることができた。		

また、自分の研究に直接関わらなくても、広くユダヤ史を取り巻くテーマに沿って、重要な先行研究や資料の収集も行なった。日本ではユダヤ史のうち中世に取り組む研究者は非常に少なく、中世ユダヤ史の大家であっても全く知らないことが多かった。ユダヤ人のアイデンティティや広い地理的な多様性など、中世史を通して共通する論点はいくつかあり、またそれらは自分の研究にも関わる論点であるため、参加した授業を参考にしながら主な重要研究について調査を行い、資料に当たった。

### 3) 研究の変化

今回の留学で、授業や学会への参加を通して、自身の研究枠組みが修正され、また定まっていたこと、また研究対象に対する態度について意識を改めるに至ったことは、想定していなかった良い結果であった。イスラエルはユダヤ史について、時代やテーマが細かく設定された授業や学会に参加する機会が多く、またヨーロッパやアメリカからも研究者が招聘される。そのため、遠くまで足を運ばなくても、遠方の研究者の発表を聞く機会が得られたことは貴重であった。コロナの影響でこうした機会に恵まれたのは留学期間に比して短期間であったが、私の研究に大きな刺激を与えてくれた。

最も印象に残っているのは、2020年1月にイスラエル国立図書館で3日間にわたって開催された“Imaging Renaissance”である。これは近世イタリアのユダヤ史の研究者が集まる学会である。この分野の研究は国際的にも歴史がまだ浅く、研究者層が厚いとは言えないのだが、分野を盛り上げようという機運があり、その一端に触れる機会となった。すでにこれまでにに行った国際学会での発表や調査旅行において交流のあった研究者らに再会し、また本でしか存じ上げなかった名だたる研究者に繋いでいただき、最先端の研究テーマに触れるとともに、今後のプロジェクトの予定なども伺うことができた。ここで聞いた発表は大変に刺激的なものが多く、私の研究の方針にも大きな影響を与えている。特に、Nicolas Terpstra 教授による、交易都市として建設されたリヴォルノを植民地主義の歴史の中に位置づける発表は、大変に示唆に富んでいた。私の研究計画は、ユダヤ教の法と儀礼の関係を明らかにすることを目的にしていたが、それは宗教とも民族とも見做されるユダヤが、キリスト教社会の近代政教分離の歴史の中で抱える問題がそこに現れると考えたためであったが、宗教学の学生として近世の激動の宗教史は学んだものの、異民族としてのユダヤについては背景として接続すべき歴史についてあまり考えがなかった。このカンファレンスを契機に、またそこから湧いた興味を深掘りする中で、植民地化と人類学・オリエンタリズムの発展という変化の中で、キリスト教社会におけるユダヤ共同体の立場を捉えることができるのではないかと考えるに至った。

その中で、私は研究対象を、ヴェネツィアのユダヤ共同体全体ではなく、レオネ・モデナに絞ることにした。理由の一つには、彼が1637年に『ヘブライ人の儀礼の歴史』という本をイタリア語でキリスト教徒の読者を想定して出版していることがある。ユダヤ教についてヘブライ語以外で書かれた本としては歴史上初のものであり、なぜモデナがこれを書いたのか、という疑問は以前から抱いていた。モデナが教義ではなく「儀礼」について書いたことに注目してみると、キリスト教社会における異民族・異教徒に対する人類学的好奇心があり、それは植民地化の動きと関係があるのではないかと推測することができる。少なくとも16世紀から植民地から収集された様々な民族に関する儀礼慣習の本は出版されており、またそこから比較宗教学が派生していくが、17、18世紀の諸民族の比較宗教の本におけるユダヤ教に関する説明は、レオネ・モデナの『ヘブライ人の儀礼の歴史』がネタ元になっていることもわかった。ヴェネツィア・ゲットーはユダヤ人の珍しい儀礼慣習に興味を持つ観光客を惹きつけるスポットでもあり、モデナもキリスト教徒が儀礼を見学することを認めており、彼らの人類学的好奇を日々目の当たりにしていたであろう。

他方で、人類学の枠組みでは時代が進むにつれて儀礼よりもそれが表す意味や教義が重視されるようになり、最終的にユダヤ教が無意味な儀礼の多い宗教と表現されるようになるが、17世紀社会の文脈にその視点を当てはめることはできない。宗教改革時代、カトリックも新たな宗派も、儀礼によってそれぞれの共同体の正しいアイデンティティを構築していた。とりわけ教会が正しい教えを失ったと考えるプロテスタントらは、ユダヤ教にその教えが残っていると考え、クリスチャン・ヘブライズムの風潮を作った。こうした時代背景については、Aya Eldaya 教授の授業に学んだところが大きい。この授業では中世から近世までのキリスト教学者のなかのユダヤ教への興味の歴史を扱ったが、16世紀以降については、ヘブライ語を学び文献を読む学者が増え、また儀礼体系のユダヤ化が進んだこと、ルター派はそうした動向を危険視して分裂し、のちの儀礼よりも教義を重視する流れを作ったことを学んだ。すなわち、レオネ・モデナの時代にはユダヤ教の儀礼を重視する一定の流れがあったことが想定できる。実際、先行研究や資料を追う中で、『ヘブライ人の儀礼の歴史』を求めた人々にはこうしたヘブライストやプロテスタントが多く、またローマ教皇と対立するヴェネツィアに避難していたプロテスタントの重要人物ら

がモデナと接触していたこともわかった。モデナは『盾と剣』というキリスト教論駁書を遺しているが、そこでは同時代のキリスト教改革派のカトリック批判言説の影響が見られる。モデナはユダヤ教にキリスト教の元の教えを見出そうとするヘブライズムの風潮を生かし、キリスト教とユダヤ教の差異を縮め、またキリスト教がどこでユダヤ教から変わってしまったかという議論をしている。このことについては2020年9月の京都ユダヤ思想学会シンポジウム「中世ユダヤ教聖書解釈の諸相：キリスト教世界とその周辺」で発表した。今年度中に同学会誌に掲載される予定である。

さらに、Katherine Aron-Beller 教授はイタリア・ユダヤ史についての授業を担当していたが、授業の合間に面談をしてくださり、同時代のドイツにおいてユダヤ教の儀礼を呪術的なものとして描く本が多く出版されたこと、また同様にユダヤ教＝エキゾチックとみなす視点はイタリアにもあり、それはユダヤ教への関心を惹きつける有利な点でもあり、それらがモデナの執筆の背景にあるだろうということ指摘してくださった。また、Roni Weinstein 教授との面談では、ユダヤ教に対する視線が、西欧社会におけるオスマン・トルコに対するオリエンタリズム的な視線と関連することを知った。『ヘブライ人の儀礼の歴史』出版の手助けをしたフランスのヘブライストが、もっと呪術的な要素を書いて欲しかったとモデナに対して書きよこしたり、レオネがパリ大学東洋学のヘブライ語の教授職をオファーされていたことは、クリスチャン・ヘブライズムと人類学的関心の交差を示しているのではないかと考えている。モデナがこうした視線をどのように受け止めていたか、より詳しく調べていくつもりである。

指導教官のRoni Weinstein 教授による中近世ユダヤ史の講義は、イスラム圏、キリスト教圏を跨った中近世におけるユダヤ法や儀礼慣習の変化とそれを示す資料を扱うものであったが、その中で近世ユダヤ社会で儀礼の多様性に気づき、その体系化・均一化の動きが印刷を通して生まれ、中東ユダヤ社会で法典化されてラビに代わる法的権威の源泉になったこと、またそうした法・儀礼体系の法典化は法学者のカバリストが関わっていたことを学んだ。神秘主義と法が不可分な関係にある、というのは近代のキリスト教的な宗教概念ではうまく捉えられない点であり、Weinstein 教授はイスラム圏の歴史的な文脈でもあったとしていた。神秘主義の要素を帯びた行為体系としての法は中東からヴェネツィアにも入り、大衆にも受け入れられるが、レオネ・モデナはカバラーをユダヤ教の伝統への脅威と考えて反駁文を書いている。モデナのカバラー批判と『ユダヤ人の儀礼の歴史』の執筆の関係を分析することは、キリスト教社会のユダヤ社会における法と儀礼の関係の特徴を明らかにする上で重要ではないか、と授業を通して考えるに至り、現在資料の精読を進めているところである。

現在考えている枠組みでの研究はまだ途上である。特にヴェネツィア・ゲッターを植民地史に位置づけるという枠組みは、植民地主義の論点の複雑さや歴史の幅広さから慎重を要し、まだ勉強の段階である。レオネ・モデナは、支配者であるヴェネツィア共和国に対して、共同体内の慣習法をヘブライ語からイタリア語に翻訳して提出し、またキリスト教社会に向けてユダヤ教の儀礼をイタリア語で説明しており、モデナの立場は、植民者の社会体系に合わせて被植民者が自己の社会体系を翻訳していくエージェントとして捉えると非常にわかりやすく、既存の研究から応用できる議論が多くあると考えており、今後はこの側面に力を入れていきたい。

授業を通して、ユダヤ史研究の難しさや研究への態度について学ぶ機会も多かった。ユダヤ史に携わる上での政治的な難しさについては、様々な授業や研究者との面談を通して少しずつ見えてきたところがあったが、とりわけRam Ben-Shalom 教授の中世西欧ユダヤ史の授業に学ぶところが大きかった。この授業では、ユダヤ人による歴史記述の資料を読み解きながら、広く受け入れられている中世史の語りに疑義を挟む刺激的な議論が多く、イスラエル人の歴史観に挑戦するような内容でもあったようで、授業中に学生と先生が激しい論争を起こすこともあった。イスラエルにおける歴史を通じた国民意識とともに、研究を取り巻く政治的な文脈、それに対峙する学問の厳密さを学ぶことができた。留学前には、近世以前の歴史は現代の政治的な問題からは一定の距離をおけると考えていたが、殊にユダヤ史においてはあらゆる歴史の場面が政治的に利用されがちであるという教授の問題意識を授業を通して感じ、今も歴史との向き合い方を再考している。

### 留学中の生活・研究でのトピックス

留学中の生活に大きな影響を与えたのは新型コロナ・ウィルスの流行である。イスラエルでは 2020 年 3 月中旬からおよそ 1 年間にわたってロックダウンを繰り返した。最も厳しい時には居住地から 100m 以上の外出が許されないという状況になり、大学や図書館を使えない日々が続いた。ロックダウンの規制のレベルや図書館などの開館などは急に決まることが多く、数時間おきに方針が変化することもあり、わずかな機会を逃さないための情報収集も一苦労だった。またビザ延長の手続きの際も、大学事務が出勤できずに書類がなかなか入手できなかったり、延長の数日前に内務省で感染者が出て窓口が閉まったりなど、心理的に疲弊するような事態が続いた。

滞在中のイスラエルの感染状況はかなり酷く、人口 900 万人に対し、1 日の新規感染者が 1 万人を何度も超えた。いつ自分の身の回りに迫るか、という不安はあったが、寮で共同生活していたので、体調不良の場合には互いになんらか助けられることができる、と考えることができたのは不安の緩和にはなった。寮の仲間とは、ロックダウン中に一緒に料理したり祝祭日にはパーティをしたりしたので、外出ができないこと自体にはあまり不満は感じなかった。

イスラエルでワクチン接種が早く進んだことで、2021 年 4 月にはほとんど元の生活に戻ったが、その後ハマスとの紛争状態に入り、再び授業がオンラインになった。寮の全ての部屋にシェルターが備わっているので、広範囲のロケット弾攻撃にはそこまでの不安は感じなかったが、街中で展開されるパレスチナ系とイスラエル警察との衝突や、市民同士の繰り返される暴力は精神的な打撃が大きかった。特に寮の付近は、警察によるパレスチナ系住民の立ち退きが展開されていたシェイク・ジャッラに近く、大きな衝突が頻発し銃声や催涙ガスの音などが聞こえるため、日々悲しい気分が募っていった。若い世代が主体となって暴力と不平等への抗議活動が行われたが、穏やかに行われているこのデモが治安部隊の攻撃対象になることもあった。

留学の環境としてはかなり厳しかったという印象だが、兵役のあるイスラエルの非常時の対応の速さや、コロナと紛争を通して明るみになった社会的問題を目の当たりにしたことは貴重な経験になったと今は考えている。



### 今後の社会貢献

イスラエルで学ぶ中で、これまでの自分の研究が西欧中心主義的な歴史観の中にあつたことを痛感させられた。西欧ユダヤ史でさえ、それを語るときの時代区分、地図の取り方、主要な論点について、中東の文脈に身を置く研究者の捉え方は刺激的であった。ユダヤ学を日本で行う際に、当事者ではないという点で西欧研究者とは異なる視点を持てると言われることがあるが、日本は西洋文化圏の外にありながらも学問においては西洋の輸入に頼りながら構築し、アジア圏という立場を生かしきれていない部分があるのではないかと考えた。今後は留学で身につけたもの、収集した資料を生かして博士論文を仕上げ、教育に携わっていくことを目指しているが、日本の既存知識体系の基盤の偏りを修正しながら、自分の受けた刺激を伝えていきたいと考えている。